

令和6年度データサイエンス・AI(DIAL) プログラム自己点検・ 評価報告書

グローバル Biz 専門職大学
データサイエンス・AI (DIAL) プログラム運用 WG

2025/03/31

1 プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

- 組織名：データサイエンス・AI (DIAL) プログラム運用 WG
- 責任者：石畑 宏明（教授）

2 プログラムの履修・修得状況

今年度は最終的に本プログラムを10人履修し、10人単位習得した。授業期間中の学習進捗・取り組み状況については、Google classroom を使用した、小テストの成績、課題の提出状況などから把握している。

- IT 概論では、毎回小テストを行い、15 回分の平均点は 69.1 点であった。正答率の低い問題については、後続の回の講義で再説明し理解状況を確認した。課題提出をしなかったものは単位取得できない。
- ICT 演習では講義内で毎回演習を行うが、提出課題（15 回分）の提出率は 100% であった。
- スタディスキルズでは、毎回の授業で Google フォームを活用した小テストを実施した。90 点以上を獲得できるまで再提出させた。

学修成果は、必要となる科目3科目の単位取得率によって評価する。本年度の単位取得率は、スタディスキルズ：100%、IT 概論：100%、ICT 演習：100% と十分な学修成果が得られていると評価する

3 学内からの視点

本学では、開講している全科目を対象として履修者への授業アンケートを実施している。アンケート項目には、科目受講に対する満足度のほか、シラバスに記載された学習目標の修得度の自己評価、自由記述による改善希望の提示等を含んでいる。

本プログラム対象科目においても同アンケートを実施し、受講生の習熟度の自己評価を把握するとともに、ニーズを把握し、プログラムの改善・高度化に務める。

ICT 演習では、アンケート中の受講生の習熟度や学修目標に到達度、受講に対する満足度に関するものとしては、6 段階（1～6）中以下の平均点となった。解答率は 100% であり、いずれの項目も高評価で学生の満足度は高いと判断できる。

表1 ICT 演習の授業アンケート結果：学生数 10 人、1-6 段階評価

アンケート内容	結果 (平均点)
内容をよく理解できた	4.7
到達目標が達成されるように授業が行われた	5.1
効果的に学生の参加を促していた	5.2
学生の理解度を把握して授業が進められていた	4.9
学生が問題や課題を考えたり、見出したり、発言する機会があった	5.0
自分の考えを論理的・批判的に整理する機会があった	4.7
ICT ツールを効果的に活用していた	5.3
課題や宿題は有益であった	4.6

スタディスキルズと IT 概論では、アンケートの項目が変わったため、ICT 演習のような評価はできない。授業のわかりやすさを聞いた項目 (1～4 の 4 段階評価) では、スタディスキルズが 12 回答で平均 4.0、IT 概論が 7 回答で平均 2.3 であった。

今年度のアンケートの結果から学生の修得度・満足度は高いと評価できる。

今年度の学生アンケート時点では、本プログラムの周知が行われなかったため、アンケート中にこのプログラムの推奨に関する項目はない。ICT 概論のアンケートの結果から、学生の評価は高いと思われるので、後輩に推奨する可能性も高いと考えられる。来年度以降項目を追加して情報収集することを検討する。

本プログラムは、今年度が初年度の取り組みであり、履修率の向上が喫緊の課題であると認識している。履修率が悪い原因は、定員に対する学生数が少ないことにある。本学は開校 2 年目のため、収容定員の 1/2 の学生はまだ入学していないことも履修率が低くなる要因の一つである。次年度以降計画に沿って入学者数の増加に努め履修率向上を図る。

4 学外からの視点

本プログラムを構成する科目は全て 1 年次の科目であり、進路・活躍状況などについての情報はまだ存在しないので、今後評価する。本学で実施しているインターンでは、インターン先の企業からは、以下のような良い取り組みであるとの意見があった。

- IT 系企業のインターンシップ先で C # を活用してスマホアプリを作成する際に、本学の学生が「ググる」ではなく「Chat ル」を行い自分で調べようという姿勢に企業側の方が高評価を与えていた。
- 「大学を卒業する時には、もっと生成 AI は進化してビジネスに活用されている。大学が AI をどのように活用するか、何をしてよく何をしてはいけないかを体系立てて教えている、という点でとてもいいと思います」という評価をいただいた。
- メディア系の職種においても社会のトレンドを調べてプレゼンテーションをする際に生成 AI から出力された結果を学生が裏付けをとっていることを、よい意味で驚いたという評価があった。

本学の産業界出身の教授からは、次のようなコメントをいただいている。

近年の産業界においてデータサイエンス、AI の重要性は増している。インターネットの登場、デジタル技術の進歩によりグローバル化した社会において、事業推進における意思決定の迅速化が求められている。意思決定においては適切なデータの収集と分析、分析における AI の活用による課題発見が重要な要素となっている。

一方、データサイエンス、AI を活用できる人材は不足しており、その人材の確保は難しいという現状がある。外部からの人材獲得、在籍社員のリスクリングによる社内での育成では、その確保にも限界がある。今後期待すべきはデジタルネイティブである新卒社員の活用が挙げられる。体系的にデータサイエンス、AI を学

んだ者が、即戦力としてビジネスの現場で活躍することが期待される。

本学の教育プログラムはデータサイエンスが導きだされる課題の提起、その課題に対して向き合ふべき課題解決力を養うプログラムとなっている。また、AIを活用することで新たなビジネスを創出する基礎力を養うプログラムとなっている。本プログラムを修了した学生が社会で活躍することが期待される。

5 継続的改善への取り組み

ICT 演習や IT 概論の講義中では、「データを分析しそれをもとに種々の判断を行うこと」を強調している。

ICT 演習では、身長・体重などの身近なデータでの作業だけでなく、プロ野球でのチームの勝率や選手の年俸分布データなど学生の興味を引きそうなデータを対象とするように心がけている。

スタディスキルズでは、学生が希望するインターシップ先の業界・職種でどのように AI が利活用されているかについての調査とそのプレゼンテーションを行い相互評価を実施した。その結果、興味がない業界でも、他学生のプレゼンテーションを聞いて興味をもつ学生が現れた。職業自体を調べることで大学での学びを深化させることに繋がるよう心がけている。

IT 概論では、毎回講義内容に関する小テストを行い、内容理解の程度を確認している。理解不足と思われた場合は、次回の講義で補足などをして、脱落者がでないように努めている。

ICT 演習では、毎回の演習で身につけたスキルを使用する課題を提出させている。データサイエンス関連の講義回では、グループワークを取り入れ、学生間で相互に刺激し合って知識・スキルが身につくようにしている。

スタディスキルズでは、他の科目の先駆けて授業を行うことから AI リテラシーは身近なもので理系の学生が学ぶのではなく文系の学生にこそ必要であることを伝えている。各授業後のレポート提出も択一式にすることで「AI は難しい」という意識にならないような工夫をする。同時にパソコンやスマートフォンなどにアプリをインストールして、授業内で気楽に使ってもらい学生自身がカスタマイズ（生成 AI に勉強させる）メリットを伝えた。学生たちは、音声入力なども活用して友人同士でプロンプトについて情報共有することで、より身近に感じるようになっていた。

以上.